外縁はどこにあるのか

予期・幻想・誤配から『マタギドライヴ』を読む

2026年10月4日

公開資料を足場にした、*AI*と自由についての試論。*AI*との対話をもとに構成した。

選ぶ自由から、選ぶ私へ

情報環境のなかの自由は、しばしば選択肢の多さとして語られる。だが問うべきなのは、選ぶ私がどのように成り立ち、どう変わりうるかである。選択肢がいくら増えても、選ぶ側の基準が固定されたままなら、自由は同じ欲望を満たす回路の拡張にとどまる。AIが選択肢を増やし、その選択を評価する基準にも関与するとき、人はその基準自体を変更する側に回れるのか。

本稿は、公開資料を足場にした、AIと自由についての試論である。この問いを落合陽一『マタギドライヴ』(PLANETS、2026年)に当てて考える。同書は、計算機が自然となった環境で、未知の文脈へ出かけて発見を持ち帰る生き方を描く。補助線には、宮台真司の権力の予期理論、ジジェクの幻想論、東浩紀の訂正可能性と誤配を用いる。

あらかじめ範囲を断っておく。本稿は刊行版を通読したうえでの評価ではない。公開された巻頭の用語解説と図版、旧連載の無料部分、宇野常寛による紹介、刊行記念の対談を手がかりに、本文へ持っていく問いを組み立てるものである。三人の論者を一つの理論として扱うつもりもなく、つなぎ目の多くは本稿が架けた橋である。生活の保障と目的の訂正に重心を置くのも、AIとの対話のなかで選ばれた一つの立場であって、三人の議論から必然的に導かれる唯一の結論ではない。

予期が選択を方向づける

宮台真司の権力の予期理論は、権力を誰かが所有する力ではなく、服従する側が経験する選択の構造として捉える。相手の反応を予期することで、より望む選択を自分から断念する。この構造は命令や制裁が実際に下される前から働き、権力者の意図や自覚を必要としない。

情報環境に引き寄せれば、書きたいことはあるが、評価を失うことを見込んで別のことを書く、という場面がそれにあたる。発言の自由は形式上あっても、予期される応答が選択を拘束している。ただし、推薦されたものを楽しむことまで、すべてこの意味の権力と呼ぶことはできない。

予期理論の基本モデルは、服従する側の選好を前提に置く。そのため「そもそも何を望ましいと感じるのか」へ進むとき、本稿は宮台の枠の外へ一歩出ている。それでも予期の視点は最後まで手放さない。失敗や異議のあとも生活が続くと見込めるかどうかが、何を試みるかを出発点から方向づけるからである。

新しい獲物と同じ狩人

ジジェクの議論では、欲望は対象を次々に変えても、それを欲しくさせる幻想の枠組みを反復しうる。未知のものに出会い続けることと、欲望の構造が変わることは同じではない。誰も見つけていないものを発見する営みも、独創的な者として認められたいという欲望の反復でありうる。獲物は新しくても、狩る者の位置は変わらない。

精神分析には、主体の変化を扱う「幻想の横断」という概念もある。そこで問われるのは、自分の存在を保証してくれる意味や、他者の欲望への依存である。自分についてより納得できる説明を得ることとは違う。「未知に出会って、私はいっそう独創的になった」という自己理解は、かえって従来の幻想を補強しうる。

したがって、変わったかどうかの試金石は、経験の新しさではない。認められることで自分の価値を保証したいという関係そのものが動いたかどうかである。この基準は、次に見る東の「訂正」と緊張させて読む必要がある。両者を同じ変化の別名として扱えば、ジジェクの側の厳しさが消える。

訂正と誤配

東浩紀は、『訂正可能性の哲学』（2023年）で『存在論的、郵便的』（1998年）以来の宿題をようやく終えたと語っている。その読み直しでは、人やものについての説明が訂正されても、名は同じものを指し続けうるという

点に重心がある。何者であるかを一度で確定することより、その説明を訂正できることが重要になる。ただしこれは後年の自己解釈であり、1998年の議論そのものとは区別しておく。

誤配について、東は2018年、読者の質問に答えて、計算可能な市場の外に純粋な贈与の世界を置く発想に疑問を呈している。現実は、カネの話が愛の話になり、愛の話がカネの話になる相互陥入に満ちている。誤配とは、そうした取り違えの可能性を信じ続けることだという。外部を確保することではなく、交換のなかで意味がずれることが問題になる。

2026年の福尾匠との対談では、東は誤配の条件を、郵便物が届くまでの経路が一時的に見えなくなることに置いた。プラットフォームがすべてを統一していないからこそ、誤配は起こる。もっとも、利用者に仕組みが見えないことと、行為が回収しきれないことは別である。利用者だけが分からないブラックボックスは、支配の非対称性をむしろ強めうる。

中心と外縁の往復

『マタギドライヴ』本文103頁の概念図は、この本の運動を一枚で示している。中心には、自動化された生産基盤としてのプラットフォームがある。探索者はそこから、未規定なもの、未知の文脈、ローカル文化が散らばる外縁へ出て、獲物としての発見やアイデアを中心へ持ち帰る。

宇野常寛の紹介によれば、この往復は『魔法の世紀』のアート論の一般化である。プラットフォームから逸脱した成果が再び回収され、プラットフォームが更新される循環だ。落合自身も、マタギドライヴを逸脱と更新に重ね、資本が周到に配置した森で獲物に出会う採集を、これからの「労働」と呼んで、未規定なものを狩る営みと区別している。回収は批判者が外から持ち込んだ枠ではない。問うべきは、回収が起こるかではなく、どういう条件で回収されるかである。

外縁には二つの読みが成り立つ。中心がまだ利用していない価値の供給地という読みと、中心とは異なる時間や価値判断が営まれる場所という読みである。図の語彙は前者に寄り、巻頭の用語解説が語る調律や共存は後者を支える。発見が還流するという矢印だけでは、どちらとも決まらない。

用語解説は、計算機自然にも設計者・所有者・運用者がいることを認めたうえで、その振る舞いは支配しきれないと述べる。そして、クラウドの障害や仕様変更を天候の変化にたとえる。この比喩は、技術が道具を超えて環境になったという経験を確かに捉えている。だが、自然と人工の境界を存在論的に薄くすることから、変

更できる決定と受け入れるしかない条件の区別まで政治的に薄くしてよいとは導けない。利用者にとっては天候でも、運用者にとっては設定である。

刊行記念の対談で、落合は、先端のモデルが短期間で普及し、投資の回収が難しくなる構造が繰り返されると見立てている。崩壊を予測するわけではない、と本人は留保しているが、モデルの水準での優位が崩れることは著者自身の主張である。一方、計算インフラや電力消費の拡大を語る部分では、基盤の所有がどう変わるかは語られていない。批判の焦点は、この基盤の所有と利用条件に絞られる。

帰属・保障・決定権

宇野の紹介によれば、落合は、生成AIの成果物は人類の叡智の集積であり、その権利は人類全体に帰すべきだと書いている。旧連載でも、作物や創作物を個人の所有に帰属させる農耕的な価値観と、マタギの価値観は相容れないと述べていた。帰属について、著者は規範的な答えをすでに出している。未確認なのは、その答えを実現する仕組みである。

「人類全体への帰属」は、誰でも無償で使えること、収益を共同で受け取ること、運用を共同で決めることの、どこまでを含むのか。旧連載が強調するインフラのコストの民主化や、テクノ民藝の無銘性と複製可能性は、無償利用の読みに寄りやすい。その場合、共有された成果は、狩りの道具や基盤へのアクセスという機会の側の資源になる。

刊行版の第6章には、マタギドライヴが持続的に生きられる環境条件を「AI＋BI」型と「AI＋VC」型の社会モデルで論じる節がある。東は2022年、『デジタルネイチャー』（2018年）の社会像を、少数の資本家＝エンジニア層と、政府のベーシックインカムで衣食住を保障される大多数とに人類を分けるものとして批判した。ただし東自身、BIの意味については「らしい」と留保している。刊行記念の対談では、落合が二つのモデルはいま現実になりつつあると語っているように読める。階層として固定されるのか、選べて移動できる生き方なのかが、本文での最大の確認点になる。

旧連載第5章は、持続可能性を資源分配の社会的インフラの問題と位置づけた。富は十分に蓄積されている可能性が高い一方で、再分配は著しく不十分だとし、個々人に狩りの対象を見出すための資源が届く構造を築き直すべきだという。無料部分で示される具体策は、クリエイターの未来価値を投資家に示して資金を集める仕組みで、根拠はベンチャーキャピタルの論理である。十の投資先のうち九つが失敗しても、一つの成功で全体の効率が見込める。

ここに非対称性がある。投資家は複数の挑戦に資金を分散できるが、挑戦する個人は自分の生活時間を同じようには分散できない。投資全体が成功しても、外れた人の生活が支えられるとは限らない。確率についても、投資家のリスク分散、能力主義的な選別の修正、最適化への抵抗は、それぞれ別の働きである。落合は旧稿で、実力主義だけに頼らず運の要素を制度設計に組み込むべきだと述べているが（藤川大祐の引用による）、機会に偶然を入れることと、生存の条件を偶然に委ねることは区別しなければならない。

そこで生活の床について、問うべきことは三つになる。財源がどこから来るか、財源が減ったとき誰が負担するか、その負担を誰が決めるかである。投資の利益に依存していても、蓄えや別の財源で給付を保つ仕組みはありうるし、共同の収益であっても変動の負担は残る。ここで宮台が戻ってくる。成果を認められなくても生活は続くと見込めないなら、探索は出発の時点から中心の評価に方向づけられる。

四つの式

ここまでの問いは、既存の数理モデルを足場に、四つの式に置き直すことができる。前の二つは研究上の概念であり、後の二つはAI（ChatGPT）との対話から得られた規範的な設計仮説である。四つの式は議論の構造を示すためのもので、どの社会が望ましいかを数学的に証明するものではない。

第一は、遂行的予測の最適化問題である（Perdomo ほか、2020年）。

$$\theta^\star \in \arg\min_\theta \ \mathbb{E}_{z\sim\mathcal{D}(\theta)}\left[\ell(z;\theta)\right]$$

θ は採用するモデルの設定、$D(\theta)$ はそのモデルに基づく判断によって生じる現実の分布、ℓ は何を誤りとみなすかの基準である。要点は、現実の分布のほうにもモデルの設定が入っていることにある。ある表現が人気になると予測されて推薦され、目に触れて人気が生じ、その結果が次の学習に入る。

ただし、この再学習の循環そのものが行き着くのは、同じ論文が区別する遂行的安定点のほうである。

$$\theta_{\mathrm{PS}} \in \arg\min_\theta \ \mathbb{E}_{z\sim\mathcal{D}(\theta_{\mathrm{PS}})}\left[\ell(z;\theta)\right]$$

再学習を繰り返すと、一定の条件のもとで、モデルが自分の作り出した分布に対して最適になる点へ収束する。そこでは予測は自己確認的になる。予測の正確さだけからは、もともとの傾向を捉えた部分と、予測に基づく介入が生み出した部分を判別できない。両者が同時に働くこともあり、区別するには別途の因果分析が要る。生み出された現実が望ましいことも、正確さは保証しない。これは、回収と更新の循環を形式化したも

のと読める。ℓ は技術上の設定であると同時に、モデルが生んだ現実を誰の基準で望ましいとするかという、社会の価値判断を担うことになる。

第二は、エンパワーメントを個人 i に当てはめた式である（Klyubin ほか、2005年）。

$$\mathcal{E}_i(x, H) = \max_{q_i} \; I\left(A_i\,;\, S_{i,t+H} \mid x_t = x\right)$$

A_i はその人が取れる一連の行動、q_i はその行動列に与える確率分布、$S_{i,t+H}$ は一定時間後に本人が知覚する結果、I は相互情報量である。平たく言えば、自分の行動を変えることで、区別できる違う未来をどれだけ生じさせられるかを表す。百の選択肢が示されても、どれを選んでも同じ結果になるなら、この量は増えない。豊富な提案を受け取れることと、行動によって将来を変えられることは別である。この式は宮台の問いに、行動が結果を変えられる範囲という別の観点を加える。ただし、発言すれば罰せられ、黙れば罰せられない環境でも、行動が結果を変える経路はあり、この量は正になりうる。予期による断念を捉えるには、制裁や行動の費用、選好についての記述が別に要る。

第三は、対話から得られた設計仮説である。

$$\pi^\star \in \arg\max_{\pi \in \Pi_{\mathrm{adm}}} \; \min_{i} \; \mathcal{E}_i^{\pi}(x, H)$$

π は社会の制度や技術の配置、Π_{adm} は許容される配置の集合である。生活の床は、最大化する目的の側ではなく、この許容条件の側に置く。

$$\Pi_{\mathrm{adm}} = \{\pi \;:\; b_i^{\pi} \geq b_{i,\min} \quad (\forall i),\; \ldots\}$$

b_i^{π} は配置 π のもとでの各人の生活保障の水準、$b_{i,\min}$ はその下限であり、ほかに生態系の持続や他者への強制の抑制も条件に含める。生活の床をこの条件として確保し、それを満たす制度のなかで、将来へ働きかける余地が最も小さい人の余地を広げる。保障する条件と最大化する目的は分かれる。情報量で尊厳や幸福を測り尽くせるとは考えないし、誰のどの行動と結果を数えるかで値が変わる問題も、この式は解決していない。制度の候補や保障の測り方も未指定で、計算できるモデルにはなっていない。

第四も設計仮説で、目的を固定し切らないための式である。

$$\ell_{t+1} = \mathcal{U}\left(\ell_t,\, e_t,\, d_t\right)$$

e_t は新しい経験、d_t は異議や、それまで評価に入らなかったものとの出会い、U は何を損失や成功とみなすかを更新する手続きである。ただし U の中身は定義されておらず、更新が実現することも、望ましい結果にな

ることも、この式は示さない。目標を達成する途中で、その目標が自分に合わないと知ることがある。そうした変化を「当初の目標からの逸脱」と処理する社会は、精密になっても窮屈だろう。更新の手続きは誰かに独占されず、手続き自体にも異議を述べられる必要がある。

しかし、第四の式には第一の式が影を落とす。経験 e_t も異議 d_t も、多くはモデルの影響下で生まれる。もっとも $D(\theta)$ は、モデルの利用によって変わる対象の分布であって、人の経験や解釈の総体ではない。モデルの影響下にある経験からでも、矛盾や不利益、他者との食い違いは認識され、評価基準の変更につながりうる。問うべきは、そうした経験が既存の基準に沿った改善として処理されるだけか、基準そのものを問い直す理由として受け止められるかである。

外縁はどこにあるのか

ここで出発点の問いに戻る。103頁の図の外縁は、中心が利用する供給地なのか、異なる時間や価値判断がある場所なのか。式で言い換えれば、同じ現実のなかで生じた経験や異議を、現在の評価基準そのものへの異議として扱えるかという問いである。

外縁は純粋な外部ではありえない。東が言うようにカネの話と愛の話は入り込み合い、マタギもまた獲物を里の経済と交易して暮らす。落合は旧稿で、交易の際には獲得の過程をマタギ言葉で世俗から隔て、モノの強度だけを問わせる「原理のゲーム」を推していた。過程を見せずに還流できることは、経路が一時的に見えなくなるという誤配の条件と響き合う。だがそれは、還流したものが予定外の用途や関係を生むことと同じではなく、評価の基準まで動くことはさらに別の問いである。

外縁は、モデルから因果的に切り離された場所である必要はない。外縁がありうるのは、持ち帰ったものの宛先がずれうるところ、探索に失敗しても生活が続くと見込めるところ、そして何を成果と呼ぶかを問い直せるところだろう。四つの式で言えば、第一の循環のなかで第二の余地が保たれ、第三の許容条件として生活の床が狩りの成否から切り離され、第四の更新が基準そのものへの異議を受け止めるときである。中心が変わることは、そこから起こりうる帰結であって、探索に課す達成目標ではない。

『マタギドライヴ』がこの条件をどこまで支えるかは、第6章、410頁のコラム「価値発見工学としてのマタギドライヴ」、終章の確率論的な再分配を論じる節を読んで判断するほかない。本稿が確定できたのは、そのための一文の問いまでである。共有された成果は、探索に成功しなくても生きられる保障と、配分の条件を問い直せる立場を、どのように支えるのか。

参照

- 落合陽一『マタギドライヴ——計算機自然の辺縁における脱人間知性的文明論』PLANETS／第二次惑星開発委員会、2026年。公式副読サイト、巻頭の用語解説、目次（出版書誌データベース）。頁は副読サイトの入稿版表記による。
- 宇野常寛「『狩猟性への回帰』とテクノ民藝：文化系のための『マタギドライヴ』の読み方 #4」2026年9月10日。note
- 落合陽一「第5章　現代社会に現れはじめたマタギたち」PLANETS、2021年12月23日。note（無料部分）
- 落合陽一「終章　マタギドライヴたちが招く未来（後編）」PLANETS、2022年3月11日。note（無料部分）
- 藤川大祐「ランダム性を取り入れたデザイン論に向けて」2022年3月11日。ブログ（落合の旧連載終章後編からの引用を含む）
- 東浩紀「『誤配』について詳しく学びたい」webゲンロン（ゲンロン友の声）、2018年7月30日。webゲンロン
- 東浩紀「ハラリと落合陽一——シンギュラリティ批判——」『文藝春秋』2022年5月号。文藝春秋PLUS
- 東浩紀・福尾匠の対談（後編）、初出『群像』2026年7月号。現代ビジネス
- 東浩紀『訂正可能性の哲学』ゲンロン、2023年。
- 宮台真司「権力の予期理論」『理論と方法』3巻2号、1988年。J-STAGE
- Perdomo, J. C., Zrnic, T., Mendler-Dünner, C., & Hardt, M. “Performative Prediction.” ICML 2020, PMLR 119. PDF
- Klyubin, A. S., Polani, D., & Nehaniv, C. L. “Empowerment: A Universal Agent-Centric Measure of Control.” 2005. PDF
- 刊行記念の対談（落合陽一・宇野常寛、宇野書店）は、話者名のない文字起こしによる。発言者の区別は口調と文脈からの推定で、音源とは未照合。ジジェクの幻想論は一般的な理解に拠り、特定

の著作の頁には当たっていない。第三・第四の式は、AI（ChatGPT）との対話で示された式をもとにしている。